

S-4

医師卒後臨床研修制度の影響を受けて 安曇野赤十字病院の取り組み

安曇野赤十字病院 副院長

○中野 なかの 武 たけし

当院は長野県の中央部、北アルプスのふもと安曇野市に位置する。同じ安曇野市内に長野県立こども病院、隣の松本市には信州大学など有力な病院がある。新医師卒後臨床研修制度を一つの契機として顕在化した全国的な医師不足について、当地も深刻な状況にある。それ以前は主として信州大学の医局から各病院に研修医が派遣されていた。新制度の導入でそれが途絶した。さらに大学医局自体の医師不足、集約化などの事情で、減員や全員引き上げ、廃止となった診療科さえもでた。このような流れのなか、当院も新制度開始から新医師研修制度に参画してきた。現在我々は2つの研修プログラムを運営している。長野県統一（信州大学病院の「たすき掛け」）プログラムと当院管理型プログラムである。これまでの10名余が研修を終えている。

地元に残る新卒者の数が少なく、地域への研修医の供給数自体が絶対的に少ない。一方で長野県内には長野、諏訪といった大きな赤十字病院や、大分以前から独自の制度を運営してきた佐久総合病院などがある。さらに豊富な資金力とPRで研修医を確保している民間病院もある。そのような地域の中で、研修医確保は厳しい状況にある。

当院の研修医確保に向けた取り組みは特別のものではなく、多くの赤十字病院で行われているものと同じであろう。まず研修の質の向上について。指導医への研修制度の意義や仕組みの啓蒙、教育のためのスキルアップが重要と考え、指導医養成会への参加を勧めてきた。この中で諏訪赤十字病院を中心に地域の病院で構成される研修会はユニークだ。医師以外の他職種、すなわち看護、技術、事務部門を巻き込み病院全体で医師を育てるという視点の研修会である。厚生労働省の医師を対象にした養成会プログラムを、そのまま他職種の参加者に当てはめることに抵抗はあるが、参加したスタッフからは概ね良い反応が得られている。従来長きに亘り、職種ごとに行われてきた卒後教育の在り方の一つの方向性を示している。新人、後進の教育には各職域とも悩んでいるのだ。

次に研修医の確保について。病院ホームページへの掲載、当院で実習した学部生への案内、地元大学主催の説明会への参加、全国規模の説明会には長野県のブースでの資料配布など。最近の話題をひとつ。大学主催の説明会で当院のプレゼンテーションが大変地味だという指摘が以前からあった。先日若手医師や研修医を集め当院のPR資料を批評してもらった。その意見を踏まえて今年度は医局、看護部、病院広報合作で、新しい募集用広報資料の作成に着手した。まず研修医やスタッフの働く姿など動画を含んだ画像を集めることにした。それを病院広報でストック、編集し、研修医や看護部のリクルートに活用することにした。またプレゼンターとして、今回は大学で講義を担当していて、医学生に馴染みのある先生を起用した。全国的な説明会に積極的に参加して、多くの研修医を確保している近隣病院の例もありPRはとても重要だ。

医師派遣機関としての大学医局の機能が低下したのは事実である。一時的なものか永続的なものか流動的である。そうした中で研修医の確保が、将来のスタッフ医師確保の上でとても重要である。そして地域医療を守ることに繋がると考える。